

ブラームス(シェーンベルク編曲)/ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 Op.25(管弦楽編曲版)

ウィーンを拠点に活動したアーノルド・シェーンベルク(1874-1951)は20世紀の前衛音楽を方向づけた作曲家として知られる。初めて無調音楽を書き、12音技法を開発した彼にとって、ブラームス(1833-1897)はバッハと並んで敬愛する作曲家の一人だった。シェーンベルクは若い頃、チェロを弾いて、友だちとアンサンブルを楽しんでいたが、好んでブラームスを取り上げたという。さらに、著作『音楽のスタイルとアイディア』に含まれる「革新主義者ブラームス」という文章でブラームスの音楽の新鮮さを説いている。シェーンベルクが自分の音楽の本質と考えていた<発展的変奏>の概念は、じつはブラームスの構成法を研究しながら見出したものだった。

1937年、シェーンベルクはオットー・クレンペラーからピアノ四重奏曲第1番の編曲を持ち掛けられ、快く引き受けた。よく引用されるインタビューで、シェーンベルクは編曲の動機とその方法について述べているが、そこで彼はブラームスの様式に厳密にとどまり、ブラームス自身がきつと行うだろうと思われる改訂以上はしないようにしたと述べている。もっとも、オーケストラの楽器編成はブラームスがオーケストラ曲を書くときに用いる古典派の標準よりもほんの少し大きく、さらにイングリッシュ・ホルンやEs管クラリネット、バス・クラリネット、そしてシロフォンなどの打楽器群を加えて自在に用いて、より近代的で、音の色彩感も豊かになっている。小さな室内楽から、より豊潤でシンフォニックな音響を生み出したのである。

弦楽器のパートはそのまま弦楽器で、ピアノのパートはほとんど管楽器で奏でるようになっていて、アレグロの第1楽章からアンダンテ・コン・モートの第3楽章までは、比較的抑制された室内アンサンブルの雰囲気を保っている。ソナタ形式の第1楽章に続いて、第2楽章のインテルメッツォは流麗なテンポで流れていく。第3楽章アンダンテ・コン・モートは濃厚なロマンティシズムが魅力的だ。

最も華やかでやや俗っぽいのが第4楽章ロンド・アラ・ツィンガレーゼである。このハンガリー・ジプシー風の熱狂的な曲想を、ブラームスもシェーンベルクも愛好した。このフィナーレでは木琴とスネア・ドラムを多用し、金管楽器のフラッター奏法、弦楽器のコル・レーニョという弓の木の部分を打ちつける奏法などの特殊奏法を織り交ぜて、ノイズを含んだ響きをぞんぶんに用いながら、奔放で熱い音楽を奏でていく。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート3(ピッコロ持ち替え1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持ち替え1)、Es管クラリネット、クラリネット2(バス・クラリネット持ち替え1)、ファゴット3(コントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バスドラム、シンバル、グロッケンシュピール、スネア・ドラム、タンバリン、トライアングル、シロフォン、弦五部

※スコア上の表記